

P2-028

大分県内の小・中・高等学校のがん教育の準備状況と養護教諭の取り組みに関する実態調査

吉村 幸永^{1,2)}、草野 淳子¹⁾、高野 政子¹⁾大分県立看護科学大学¹⁾、
国立病院機構別府医療センター²⁾

【緒言】 がん対策基本法（法律第98号）の下、学校教育におけるがんに関する教育の推進が求められた（厚生労働省2016）。望ましい生活習慣の確立も含めた健康教育としてのがん教育には、医療・看護の知識がある養護教諭の関わりが重要と考える。本研究では、大分県内の小・中・高等学校のがん教育の準備状況と養護教諭の取り組みに関する実態を明らかにすることを目的とした。

【方法】 大分県内の学校に勤務する養護教諭257名を対象に実施した。調査項目は、対象者の背景8項目、学校でのがん教育の取り組みの準備状況6項目、がん教育に必要と感じる研修自由記述実施した。対象者の背景と各質問項目については、記述統計をし、がん教育実施の有無と学校種別との関連については、小学校と中学校・高等学校を2群に分類し、分析した。（ $p < 0.05$ ）自由記述は意味内容でカテゴリ分類を行った。

【結果】 有効回答率27.0%が得られた。学校でのがん教育は40名（52.6%）が実施していた。養護教諭としてがん教育には33名（41.7%）が取り組んでいた。実施している内容では、がんの予防35名（87.5%）、がんの原因34名（85%）が高く、がん患者への理解と共生10名（25%）、がんの治療8名（20%）、がん患者の生活8名（20%）、緩和ケア3名（7.5%）が低かった。外部講師の活用は、9名（22.0%）で、活用しない理由は、講師への謝金の確保困難が半数以上であった。がん教育の実施の有無と学校種別との関連では、小学校より中学校・高等学校の方が、有意にがん教育を実施していた。養護教諭のがん教育の取り組みでは、家族ががんまたは家族をがんで亡くした生徒への配慮17名（51.5%）が最も多かった。がん教育に必要と感じる研修では、がん患者の実際の生活などが挙げられた。

【考察】 大分県では、新学習指導要領の改訂に向けて、がん教育に取り組んでいた。がん教育で上げづらい内容については、がん患者の生活が身近に感じられるような研修を通して、正しい知識を得たいというニーズが感じられた。養護教諭は、配慮が必要な児童生徒の対応や担任教諭への協力・外部機関との連携等、その専門性を活かした活動が期待されているおり、今後がん教育の授業に直接携わる教諭連携し、がん教育の推進に向けたコーディネーター的役割を發揮することが期待される。

P2-029

年長児を対象とした子ども達に「自分のからだ」を伝える活動の報告1—事業実施と振り返り会の結果内容から—

川瀬 浩子¹⁾、宮崎 つた子²⁾、佐野 和香²⁾、菱沼 典子²⁾三重県立看護大学 地域交流センター¹⁾、
三重県立看護大学²⁾

【目的】

好奇心の強い子ども達に、「自分のからだを知ることを通し、自分のからだを大切にすること、そしてお友達のからだも大切にすること」を伝えること、さらに子ども達がからだの知識を毎日の生活体験と結びつけて、正しい生活習慣を獲得していくことを目的に、幼稚園・保育園の年長児に対して、からだを伝える事業を実施した。事業実施後の実施園の振り返り会での意見から、本取組の意義と課題について検討したので報告する。

【方法】

取組方法は、2019年4月にK市教育委員会との共働により、園長会議を通じ、参加を募った。主たる教材はからだについての8種類の紙芝居（NPOからだフシギ開発教材）である。開催1か月前をめどに活動案を作成し、事業当日までに担任が紙芝居8種類を一通り実施した。その中からさらに2つを取り上げて、園と共働して事業を開催し、実施園および関係者で開催当日に振り返り会を行った。

【結果】

参加した保育園および幼稚園は3園で、年長児73名、保護者44名であった。担任による紙芝居では、3園とも取り上げたのは「たべもののとおりみち」で、もう一遍は、A園とC園は「ちとしんぞう」、B園は「おしっこのはなし」であった。看護職は、紙芝居に関連した「からだエプロン」の説明やペットボトル利用の尿色の話や聴診器体験を行った。振り返り会では、担任は「難しい内容だが、回数を重ねると知っている臓器が増え、興味をもっていた」「普段の様子からは考えられないほど集中していた」「聴診器をずっと聞いていた」「（心音が）聞こえた嬉しそうに話す親子の姿があった」と述べていた。看護職からは「全員が心音を聴くことができなかったで、できなかった子どもへのフォローが必要」という意見があった。

【考察】

振り返り会での担任の発言から、紙芝居実施の積み重ねの成果や子どもの学びの反応があり、子どもと保護者の双方に生きている実感を感じてもらえたと思われる。本取組は年長児とその保護者からだの大切さを知ってもらえるきっかけになったと評価できる。聴診器での心音聴取の体験の課題は、子どもが普段聞いたことのない心音をイメージできるよう、具体的な音源など活用し、支援していく必要がある。